

の種類や内容を増やした。今後も、さらに実験実習により、実物に触れる機会を増やしていきたい。

II. 全校生徒対象, 希望者対象の事業

1. 滋賀医科大学訪問研修

(1) 目的

滋賀医科大学への訪問見学研修を通じ、医学に関する興味・関心を喚起し、知識と理解を深める。

(2) 実施内容

日 時：平成25年8月5日（月） 8：50～16：00

場 所：滋賀医科大学（大津市瀬田月輪町 TEL.077-548-2067）

参加者：1・2年希望生徒 35名

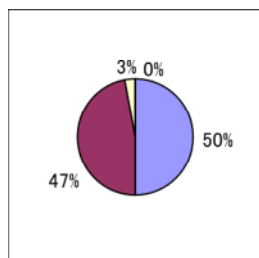
内 容：開講式

【全体講義】インフルエンザ関係 病理学講座（疾患制御病理学部門）小笠原 一誠 教授
【医学科】解剖学・組織学 解剖学講座（生体機能形態学部門）宇田川 潤 教授
【看護学科】看護の基礎知識関係 基礎看護学講座 足立 みゆき 教授
メディカルミュージアム・実習支援センター等の見学

(3) 事後アンケート結果

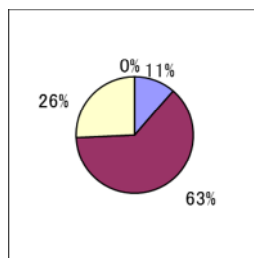
興味・関心をもてましたか。

- ① 非常に興味をもった
- ② ある程度興味をもった
- ③ あまり興味をもてなかった
- ④ 全く興味をもてなかった



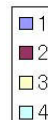
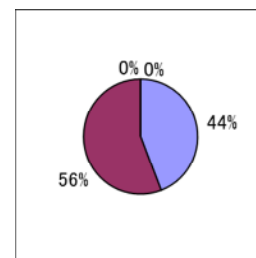
内容を理解できましたか。

- ① しっかりと理解できた
- ② だいたい理解できた
- ③ あまり理解できなかった
- ④ 全くなかった



得るものがあつたか。

- ① 大いにあつた
- ② ある程度あつた
- ③ あまりなかった
- ④ 全くなかった



(4) 評価と課題

昨年度の反省を受けて、今年度は1日研修として、医学および生物学等に興味・関心のある生徒を中心に実施した。よって、内容が昨年より濃いものとなった。午前中、全員がインフルエンザの講義を受けた。現在、新型のインフルエンザの流行が危惧される中、ウイルス研究がどのようにすすめられているか、世間一般に知られていることが実は誤りであったりすることなど、大変興味のある内容であった。ただ、高

校1年生にとっては難しい内容を含むため、あまり理解できなかったとする生徒の割合が少し高かった。次回から、研修内容に対応した事前学習をより充実させ、基礎知識をもって臨ませるように努めたい。

午後からは、希望により医学科と看護学科に分かれて、講義および実習を受けた。医学科での講義では、循環器の機能、特に肺についてはレントゲン写真や実際の標本をもとに説明を受けた。生徒達は聴診器を用いて自分の肺の音を聞いたり、健常の肺と肺炎の肺との音の違いを確認したり、臨床医としての模擬体験をした。また、看護学科では、看護の基礎の講義を受けた後、聴診器を使っての血圧測定を体験した。

基礎医学および臨床医学の最先端の施設や研究に触れ、将来の進路選択に大いに影響を与えるものとなった。ただ、実施時期が他大学のオープンキャンパスと重なり、希望者が思うほど多くなかったため、来年度は実施時期を検討したい。

2. 名古屋大学訪問研修

(1) 目的

名古屋大学への訪問見学研修を通じ、科学・科学技術に関する興味・関心を喚起し、知識と理解を深める。

(2) 実施内容

日 時： 平成25年12月24日（火） 8：15～16：45

場 所： 名古屋大学（名古屋市千種区不老町 TEL.052-789-4157）

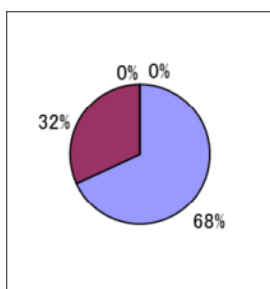
参加者： 54名（1・2年生）

内 容： 【農学部紹介・講義】 生物材料科学講座 土川 覚 教授
 農学部のあらましの紹介
 遠赤外光を活用した農産物の品質評価に関する研究事例
 【研究室訪問】 生物システム工学 動物形態情報学 資源植物環境学 分子細胞制御学
 【講義・実習】 動物形態情報学講座 井上 直子 助教
 人間の食を支える家畜動物の抱える問題について
 マウスの解剖実験および内蔵等の観察実習

(3) 事後アンケート結果

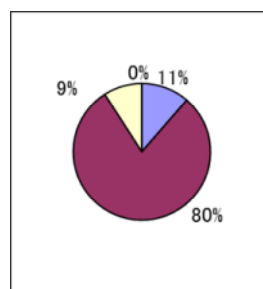
興味・関心をもてましたか。

- ① 非常に興味をもった
- ② ある程度興味をもった
- ③ あまり興味をもてなかった
- ④ 全く興味をもてなかった



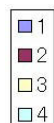
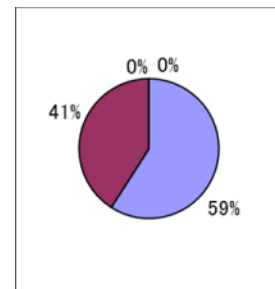
内容を理解できましたか。

- ① しっかりと理解できた
- ② だいたい理解できた
- ③ あまり理解できなかった
- ④ 全くなかった



得るものがあつたか。

- ① 大いにあつた
- ② ある程度あつた
- ③ あまりなかった
- ④ 全くなかった





(4) 評価と課題

本年度、新しく実施した事業である。名古屋大学は毎年一定数の者が進学しており、生徒にとっては進学希望が多い大学のひとつだ。今回、本校のOBである二人の農学部先生に講師を依頼した。土川教授は、自分の学生時代の体験談を交えながら、どうして研究者を目指したか、研究者としてどのような資質が必要かなど、多岐にわたって話をしていただいた。また、井上助教には、研究分野の講義に加え、幾つかの班に分かれて、マウスの解剖実験およびその観察をさせていただいた。解剖実習が初めての生徒もかなりいて、緊張感の中で進められた。小さな体に人間と同じ臓器があることに感動したとか、貴重な経験ができてよかったなどの感想が多かった。また、4分野の研究室を巡回して見学し、大学での実験および研究の様子を掴むことができたようだ。

今回の研修は、生徒にとって非常に満足度の高いものであった。来年度は、農学部以外の学部についても実施できるよう進めたい。

3. 彦根東サイエンス塾

3-1. 数学基礎講座

(1) 目的

計算力を強化し、数学力・思考力の向上を図る。

(2) 実施内容

対象： 1・2年生の希望者（第1回33名、第2回31名）

日時： 平成25年11月21日（木）、平成26年1月9日（木）（各90分間）

方法： 「16歳の教科書」の著者の一人であるKSプロジェクト代表取締役の鍵本聡先生を講師としてお招きし、計算力強化プログラムを実施した。

第1回：計算力を強くする方法（中学まで編）

四則演算を始めとする基本的な計算を早く行う方法を身につける活動

第2回：計算力を強くする方法（高校編）

方程式などの計算を早く行う方法を身につける活動

(3) 評価と課題

日頃の授業で扱う数学とは少し違う角度から問題に取り組むため、生徒は興味を持って課題に取り組むことができ、数学に対する意識を高めることについては大きな効果があった。暗記しやすい数字やポイントになる数字を記憶することで、格段に計算が速くなることに生徒も驚いていた。また、講演終了後は多くの生徒が講師を取り囲み、熱心に質問していた。数学への興味・関心を高め、基礎力の強化を図る本事業の目的はほぼ達成されているのではないだろうか。ただ計算力を向上させるだけでなく、数学的な素養を高めるための取り組みを発展的講座として展開していく必要があり、本年度は5回の数学発展講座を実施した。

3-2. 数学発展講座

(1) 目的

大学の数学へとつながる高度な内容の数学に触れ、数学力・思考力の向上を図る。

(2) 実施内容

対象： S S部数学班の生徒および1, 2年生理系生徒の希望者（毎回1年生4名, 2年生13名）

日時： 平成25年7月30日（火）、7月31日（水）、8月21日（水）、10月16日（水）、
12月11日（水）

（1・2・5回目は本校にて、第3回目は滋賀大学で終日および4回目は彦根市文化プラザで、3回目を除き他はすべて90分間の講座を実施）

方法： K Sプロジェクト代表取締役の鍵本聡先生および滋賀大学教育学部の長谷川武博先生、篠原雅史先生、神直人先生にお願いし、大学で学習する数学のイントロダクションとなる講座を実施した。

第1回：『平均』を極めよう。

「平均で計算をラクに解く。」 「等差数列は平均を意識する。」

第2回 『平均』を極めよう。

「相加平均 \geq 相乗平均でこんなこともわかつちゃう」

「模擬試験の平均点を科学する」

第3回：P進法の広がり

2進法を中心にP進法を考える

第4回：正多角形の着色ゲームとラムゼー数

ラムゼー数に係るいろいろな問題

第5回：東大入試問題から考える

「3辺の長さがaとbとcの直方体を、長さbの1辺を回転軸として90°回転させるとき、直方体が通過する点全体が作る体積をVとする。」



(3) 評価と課題

日頃の授業で扱う数学よりもかなり高度な内容を扱ったため、なかなか理解できなかった生徒もいた。しかし、数学が得意な生徒も多く、意欲的にチャレンジする姿勢が見られ、数学の世界の奥深さを体感することができたことも大きな効果であった。今後は日々の高校で学習する数学の内容と結びつけて思考力を高めるための取り組みをさらに展開していく必要がある。

4. 語学研修

(1) 目的

国際的に活躍する科学系人材育成の一環として、国際性を涵養するとともに、実践的な英語力の向上を図る。

(2) 実施方法・内容

対象： 第2学年の理系生徒のうち希望する者（S Sコース生徒16名, その他の理系生徒4名）

方法： ミシガン州立大学連合日本センターの英語指導教官マリリン・シュライフ氏（第2回のみエリック教官）の指導で、英語を用いての実践的な言語活動を行った。

第1回 5月23日 シュライフ教官の自己紹介とQ&A。英語で話すときの心構え。Warm-Up Questions, Map Questions, Travel Questions, Tongue Twisters

- 第2回 5月30日 インタビュー形式のQ & A (アメリカに関するもの)。 American Quiz, アメリカに関する文 (18文) に賛成か反対を表明し, その理由を説明する活動。
- 第3回 6月10日 Washington D.C. に関する英文を聞き, 配布資料の文の T/F を判断する。
「航空宇宙博物館」「自然史博物館」等に関する英文を聞き, 施設の情報 (開館閉館日時等) を表にまとめる活動。
- 第4回 7月11日 Presentation Skills の説明。
「航空宇宙博物館」「自然史博物館」の展示内容に関する説明を聞き, その中から各自が興味のある題材を選び, Short Presentation をする。
合衆国の出入国審査についての説明。

(3) 評価と課題

英語を聞いても, その内容が理解できていなければ, それについて考えることも, 意見を述べることもできない。逆に言えば, 聞き取りさえできれば, 思考が伴い, 自ら発信することもできる。本年度は, まず「聞き取る力」と, 次に「自ら考え意見を述べる力」の伸長につながる研修を目指した。しかし「受け身」な生徒も多く, 「自ら意見を述べる意欲」の大切さを痛感した。アメリカ研修などの実際の場面で役立てられるよう, サイエンス・ダイアログ・プログラムなどとともに, 今後も様々な場面で実践的な英語体験を積ませる必要がある。

5. 英語コミュニケーション講座

(1) 目的

授業以外の場で生の英語にふれ, 英語を使った活動をするにより, 実践的なコミュニケーション能力の取得を目指す。また, 外国人講師との活動を通じて国際的な交流を促進する。

(2) 実施内容

概要: ミシガン州立大学連合日本センター (JCMU) において, 英語指導教官マリリン・シュライフ先生, JCMU の留学生 (6名) の指導のもと, 英語を用いての実践的な言語活動を行った。

参加者は, 1, 2 学年の希望者 26 名

第1回: 10月19日 (土)

- ・ Work Sheet “Questions” を使い, 講師・留学生・生徒に質問してまわる。おもしろい意見を集め全体に発表, さらにその意見を言った人に質問を返す活動。
- ・ 4~6 人のグループ (JCMU の留学生が 1 人ずつ入る) で, 1つの課題 (Family Crossing) を議論しながら答えを見つけていく活動。

第2回: 11月23日 (土)

- ・ JCMU 留学生の selfintroduction (4つのテーマに従って) と関連質問に答える活動。
- ・ グループにわかれて, 出されたテーマに関連する語をできるだけ多く見つける活動。

第3回: 1月18日 (土)

- ・ 生徒 4~6 人に JCMU 留学生 1 人~2 人が加わったグループに分かれ, 各テーブルに置かれたパソコンを使って, 発表のテーマを決める。(テーマは主に地域の自然環境・気候・歴史など)
- ・ 発表内容を決め, 班ごとにパソコンの映像に合わせて, プレゼンテーションする活動。

第4回: 2月15日 (土)

- ・ あらかじめ, 写真や, 自分が大切にしている物, お気に入りのもの, 思い出の品等を用意し, 英語で説明できるように準備。留学生もタブレット端末やパソコンに写真等を用意。

・チームに分かれて、写真等の説明・質問をする。適宜、留学生や生徒がチーム替えをする。

(3) 評価と課題

本年度は、ミシガン州立大学連合日本センターでの実施としたため、希望者が例年の倍以上あり、やむなく参加者を抽選した。SSコースの生徒だけでなく普通クラスの生徒も多く、全校的な取り組みとして定着した。生徒は最初、「英語だけの空間」に戸惑い、外国人と話をすることに躊躇していたが、回を重ねるごとに外国人と話すことに慣れ、「英語を使って相手のことを知りたい、自分の事を知って欲しい」という意欲が増した。留学生となごやかな交流がはかれ、充実した研修であったと言える。

英語を使ってコミュニケーションを積極的に図ろうとする生徒を育てていくことが肝要であるが、相手の英語が聞き取れたこと、あるいは、自分の英語が通じたことだけに満足するのではなく、自分の意見・考えをどんどん発信していけるような英語技能・態度の向上を目指すことが大切である。

6. サイエンス・ダイアログ講義

(1) 目的

国際的に活躍する人材育成の一環として、英語による講義を聴くことで、国際性を涵養するとともに、科学分野の実践的な英語力の向上を図る。

(2) 実施内容

独立行政法人日本学術振興会のサイエンス・ダイアログプログラムとして、JSPSフェローの外国人研究員に英語による講義を行っていただいた。

日時：平成25年7月18日(木) 14:30~15:30

場所：本校SS教室

講師：Tracy Celeste BECKER 博士(京都大学防災研究所研究員, 米国出身)

同行者 峰岸 楓 氏(京都大学大学院生)

演題：「Seismic Isolation for Buildings」(ビルの免震)

博士の研究である、地震の際の様々な建造物の形状と強度の解説、構造物の強度を増すための技術についての説明

参加生徒：2年理系生徒27名

(3) 事後アンケート結果

講演の英語の理解度は、「あまり理解できなかった」と答えた生徒のほうが多かった。講師は昨年と同じTracy Bekker 博士であったが、昨年より英語を話すスピードが速かったためと思われる。しかし「研究関連の説明」は3分の2の生徒が「ちょうどよかった」と答え、「英語の研究に対する関心が高まった」と答えた生徒が大半であった。

(4) 評価と課題

この企画も3年目になり、実際的な英語に触れるよい機会となっている。本年度も、事前に配付した京都大学防災研究所のパンフレット『英語で提供するハイエンド防災講座』の一部と語句解説、写真や動画をういたスライド、同行者の日本語解説により、専門的な内容であったにもかかわらず、多くの生徒が興味深く受講することができた。

課題は「英語を聞き取る力」で、自分の語学力のなさを痛感する生徒が多かった。SS関連の英語の講座は時々実施されているが、全校的に英語の授業の改善が求められる。



7. 科学講座

(1) 目的

英語の科学用語を使って科学・科学技術の知識を習得する。

(2) 実施内容

月日： 平成26年2月10日（月）、3月13日（木）、3月17日（月） 各60分

場所： SS教室

指導： 本校理科教員1名、英語科教員1名

参加： 1年生希望者（第1回34名）

内容： 第1回「原子の構造と核エネルギー①」

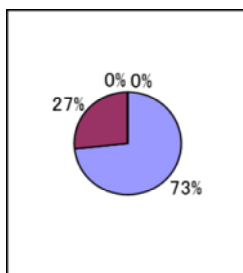
第2回「原子の構造と核エネルギー②」

第3回「ロボット工学」

英語で書かれた科学教科書、英語の科学事典等を用いて、英語の科学用語を使用しながら、科学の基礎知識を理科教員が解説し、英語科教員が随時、補足した。

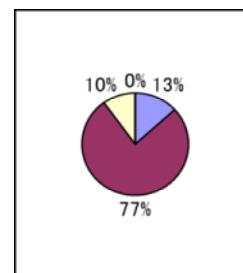
(3) 事後アンケート結果

(1) 興味・関心をもてましたか。

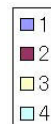


- ①非常に興味をもった
- ②ある程度興味をもった
- ③あまり興味をもてなかった
- ④全く興味をもてなかった

(2) 内容理解できましたか。



- ①しっかり理解できた
- ②だいたい理解できた
- ③あまり理解できなかった
- ④全く理解できなかった



(4) 評価と課題

アメリカ研修を実施する中で、科学英語を理解するために、英語力とともに、英単語（科学用語）の知識と科学の基礎知識の重要性が再認識された。授業で習ったことも多少入れながら、興味・関心をもてる分野に絞って実施した。参加生徒は、科学に興味があることを条件とした。その結果、関心をもって講義を聴き、理解度もよく、感想も好評であった。科学英語力の育成には、理科教員の英語の科学用語を用いた講義、または英語科教員とのTTが必要である。来年度は、回数を増やして実施することを検討する。

8. SSHアメリカ海外研修

(1) 目的 アメリカを代表する大学・博物館等での実地研修を通じ、科学技術に関する学習意欲と、将来、世界を舞台に科学技術に関わる専門的な仕事に携わりたいという意識を高めさせる。

(2) 日程 平成25年7月22日（月）～7月30日（火） 8泊9日

(3) 研修地 アメリカ合衆国（ボストン、ワシントンD.C.）、カナダ（トロント）

(4) 訪問先と研修内容

①マサチューセッツ工科大学

MITの大学院生の講義、研究員・学生との交流、大学構内の見学研修

MIT博物館での講義と実習「橋の構造と強度」

MIT核研究所での講義「原子力について」と原子炉実験施設の見学研修

②ハーバード大学

ハーバード大学の学生との交流、大学構内の見学研修

③NASA ゴダード宇宙センター

球面映像による、地球や宇宙の成り立ち、NASA の研究成果の解説
ジェームズ・ウェッブ宇宙望遠鏡についての解説と試験施設の見学研修

④スミソニアン博物館

国立航空宇宙博物館別館 学芸員による展示物の説明および見学研修
国立自然史博物館・国立航空宇宙博物館本館 テーマ別自主研修

⑤ナイアガラの滝

現地研究員による解説および自然観察

⑥その他

ワシントンD.C. 主要施設見学研修

(5) 参加者 生徒：第2学年理系生徒のうちの希望者 20名（男子9名、女子11名）

引率：本校教員 3名

(6) 事前学習 次の日程・内容で説明会および事前学習を行った。

①平成25年5月17日（金）

行程、持ち物、現地事情について、パスポートの申請手続きについて
各研修場所のホームページ等による事前調査の指示

②平成25年5月30日（木） 保護者説明会

行程、持ち物、現地事情について、パスポートの申請、費用、旅行保険、緊急時の対応について

③平成25年7月1日（月）

行程の詳細説明、アメリカの宇宙開発の歴史について（講義）
Glossary of Exploring Space の配布、スミソニアン博物館の解説（英語版）の配布

④平成25年7月10日（水）

スミソニアン博物館研修の個人テーマをもとに班分け、班別テーマ設定、テーマ表の作成・提出

⑤平成25年7月12日（金）

橋の構造と強度について（講義）、原子核と核反応について（講義）、「場面別英語一言」配布

⑥平成25年7月16日（火）

ナイアガラの自然について（講義）、各プログラムの責任者の決定
入国審査など場面を想定した英会話ペアワーク、Useful information の配布

⑦平成25年7月17日（水） 結団式

生徒代表者による決意表明、しおりを使った行程の確認（業者）

⑧平成25年7月18日（木） サイエンス・ダイアログプログラム講義

Tracy Celeste Becker 博士（京都大学防災研究所 JSPS 研究員）の英語による講義
“Seismic Isolation for Buildings”（ビルの免震について）

(7) 生徒の感想

○この研修で一番楽しみにしていたのは、NASA のゴダード宇宙センターだ。ジェームズウェッブ宇宙望遠鏡の製作の様子や、様々な実験設備を見た。一見すると、日本にもある、そこらへんの町工場のような風景だったが、いろいろ説明をきくと、「ああなるほどすごいんだ」とじんわり実感した。バスを降りた順で、なんとなく女子の後ろの方にいたが、ずうずうしくも、前の方に行き、夢中で話を聞いていた自分がいた。

○MIT 原子力研究所やゴダード宇宙飛行センターでは、観光客としてでは入ることのできない研究所内部まで入って見学でき、研究所職員の方の解説を聞きながら実物を見ることができた。写真や文章よりも実際にその場で実物を見るほうが知識の習

得や技術の理解も容易であり、また、研究所内の様子やシステムを知ることができ、将来、研究職をめざす身としては非常に得るものがあった。

○MIT の原子力研究所で、話に「すごい」としか聞いていなかったものを目の前にしたとき、本当にこんな施設が存在するのだと変な感想を持ったが、同時に努力さえすればこんな施設で研究することもできると当たり前のように気づいた。今まで、ふわふわした目標が急にはっきり見えだした。

○一番印象に残っているのはゴダード宇宙センターで、先輩から聞いてはいたが、宇宙望遠鏡を製作されているところを本当に見ることができて改めて驚いた。ジェームズウェッブ宇宙望遠鏡に関して「望遠鏡の下の5層の膜」について、いくつか質問をすることができた。多くの答えをいただき「質問してよかった」と思った。2018年の打ち上げ予定をととても楽しみにしている。

○飛行機に興味があり、アメリカ研修へ行く前は、航空宇宙博物館で色々な機体のつくりを見たいと思っていたが、研究用原子炉の見学や核分裂の講義から、今まであまり興味のなかった「核」について勉強し、「原発問題」にも取り組みたいと思うようになった。

○「科学とは何か」という問いを投げかけられた研修でもあった。例えば、ライト兄弟が初の有人飛行を成功したものの、飛行機は「兵器」として発展・進化した。原子力の発見は原子爆弾を生み、原子力発電も生んだ。冷戦でアメリカとロシアが宇宙開発を進めたから人類は月に立つことができた。すべては戦いのなかで培われ、戦争が科学技術を進展させたことは事実で、このことを考えると少し複雑な気持ちになった。

○研修前は、古代生物を調べて何の役に立つのだろうと思っていたが、研修を進めるうちに古代生物を調べることは、現代の生物に関する様々な謎を解明する鍵を探ることだと思った。人の体でさえ、まだわからないことが多く、他の生物にも知られていないことがあり、それらを発見するために、古代の生物を研究し、徐々に現代へと時代を移すことで何かしらの発見があるのではないかと思った。

○ナイアガラの滝を研修して、大自然に人々がどう対応していったのか、知ることができた。ナイアガラの上流の水力発電所は、発電すると同時に水流を調整し、ナイアガラの浸食を遅らせる働きもある。自然を保護するという観点から、科学技術の力は必要不可欠で、研修に行く前は漠然としたイメージさえほとんどなかったが、今では自然と科学の調和について少し理解できたと思う。

○私は今までの生活で、自分から理科や数学の知識を集めようと意識していなかった。自分から現代のテクノロジーについての情報を吸収していかなければ世界を舞台とした科学者にはなれないのだとわかった。

○正直、理系なんて、医者か科学者かどちらかになるんだと思い込んでいて、その枠の中で将来の夢を絞り込みがちだったが、今回さまざまなところへ見学、実習に行き、もっと深く考えてみたくなった。いつか自分も NASA のような大規模な最先端の機関に研究者として携われるチャンスを手に入れたい。

<英語などについて>

○アメリカでは学ぶにも自分の意見を言うにも、常に積極性が重視された。受動的に教えてもらうのではなく、自分が知りたいことは自分で質問していくというスタイルで、逆に、質問することをためらっていると訊けずに終わり、せっかくの機会を逃してしまう。世界を相手にするのなら、文化の違いも理解し、自分自身も適応するよう変えていけるようにしないといけないと思う。

○知りたいと思ったら、質問しなければいけない、質問しなければ何も始まらない。

○英語が苦手な僕にとっては、英語の講義は大変で、話の半分も理解できなかったこともあった。僕らが社会に出る頃には英語はどこでも必須となっており、その求められる英語力は、ネイティブの英語をそのままの速さで聞き取る力だろう。英語、がんばらなきゃな、としみじみ思った。

○事前学習をもっと十分しておくべきだったと思う。もっと勉強しておいたら、コーディネーターさんの通訳が無くても、より理解できたのではと後悔している。

(8) 評価と課題

世界でもトップクラスの大学の訪問研修は、生徒にとって関心が高く、得るものが多かったと思われる。施設見学とともに、現地の大学生や研究員との交流は非常に刺激的であり、進路を考えるうえでも参考になることも多かった。NASAの研究施設やスミソニアン博物館での研修は、先端の科学と科学技術を学ぶだけでなく、科学技術が社会に果たす役割についても考えさせられた。また、アメリカ文化とその風土に触れることで、国際性についても感じ取ったと思われる。また、本年度は、スミソニアン博物館での研修の際に、本校の新聞部が作成した英語新聞を紹介することをきっかけに、現地の人とコミュニケーションをとることを試みた。この活動は生徒にとって、発信力の必要性を実感する体感となった。

例年行っている研修であるが、毎年度、事前学習の重要性を実感する。本年度は、特にそのことを考えながら、講義を多く組み入れながら実施した。英語の科学用語と関連分野の科学の基礎知識が絶対的に必要であり、それが現地での研修の充実度に大きく影響する。昨年度の後半に行った英語の科学用語を組み入れた科学の基礎知識の習得を目指す「科学講座」は、この研修において有効にはたらいたようである。

一方、全体を通して、今までの本校でのアメリカ研修は、大学や研究所等を訪れ研究者の英語での講義を受け、知識や情報を吸収する受け身型のプログラムが多かった。次年度は、発信型のプログラムを多く取り入れ、現地の研究者等と積極的なコミュニケーションをとらせたい。また、現地での留学生に対して、英語でのプレゼンテーションを行う経験をさせたいと考えている。そのような観点から、次年度のアメリカ研修はその内容を改善する予定である。

